

# 政治と宗教における「場」の復権

—グローバルな流動性に浮上する特定「空間」の不動性<sup>1)</sup>—

渡部 淳

抄録：本論は、浮遊しさまよう流動性に現れつつある特定の「場」や「空間」の不動性に着目し、そこからグローバル化の変容の現在進行形を考察することを目的としている。グローバル化の当初の予想に反して、現代の世界はグローバル化への反動や反対を表象する様々な新しい現象を目撃している。本稿はこのグローバル化の二つの側面を一つは政治的反動から、いま一つは宗教の観点から観測し、この不安定で不確かな世界で人々が何を欲し、どこに向かおうとしているのかを考察する。現代の聖域や聖地と呼ぶべきものが人々を魅惑している。このことは人々が自らのアイデンティティや居場所を確定するために、特定の場や空間へと自らを固定し結びつけたいと考えていることを示唆している。日常生活の空間から独立した特別な場・空間に自らを置くことの安心感は、急速に進展するグローバル化のプロセスにおいて発生する不安感や恐怖の反射でもある。

キーワード：グローバル化、国家、社会、宗教、場、空間

## 1. はじめに

グローバル化とは何か。そして、一見すると反グローバル化あるいはグローバル化への反動現象のようにも思える、世界各地で起こる国家・国民・宗教・地域などへの原理主義的・保守的回帰は、グローバル化の副次的効果あるいは本質的転換の兆候を示しているのだろうか。それとも、グローバル化の基本的な性質である相互連結性を世界は保ちながらも、同質化を目指す「グローバリズム」の空間戦略とは異なる、グローバル化の中の多様性を示すいくつものスポット（場）の顕在化を私たちは目撃しているのだろうか。

本論では、グローバル化によって1つの世界になった、あるいはなりつつあると言われる現代において、グローバルな空間をさまよう国家や社会あるいは個人が何を求めているのかを、特定の動かない「場」あるいは「空間」の新しい復権をキーワードに、その方向性を探る試みである。グローバル化の時代、開かれた空間の自由な往来を楽しむある種のノマド性が、新時代の世界市民の特徴であるように一時期思われた。しかし、9.11 テロ、イラク戦争、リーマンショック、イスラム国の台頭、Brexit やトランプ大統領の誕生など、この20年間に世界で起きた出来事や、現在進行中のさまざまな政治経済あるいは社会文化のトレンドの方向性は、グローバル化における人間や共同体の心性が必ずしもグローバル化の状況に完全に適合し、あるいはその中で幸せや安心を見い出せていないことを示しているのかもしれない。

本論では、まず、グローバルな世界における反／非グローバルな諸現象を俯瞰し、その現状と背景を整理する。次に、宗教などの事例からグローバルな大交流時代・大移動時代の流動性に浮上する特定の「場」や「空間」の新しいあり方について考察し、これらが示唆するグローバル化の新しい段階や特徴についても考察を加えていく。

## 2. 世界に吹き荒れる「回帰」の風：反／非グローバル化は本当か

20世紀の後半、世界は「一つの世界」という大きな夢を見ていたのだろうか。世界貿易の拡大、冷戦構造の崩壊、進展する経済や地域の統合。共通ルールの下で、私たちは政治・経済・社会・文化のすべての領域で連結し、統合し、国民国家は依然として存在するものの、まさにカントが謳った世界共和国のような状況に進んで行くのかとも思えた。このグローバル化のプロセスは、特に経済分野での生き残りの必要性から諸国家自らによって推進されたもので、特にいわゆる先進国、アメリカ、イギリスそしてヨーロッパ（そして勿論日本も）の役割はとても大きい。しかし、このグローバル化に大きく貢献し、リベラルな世界秩序を牽引してきた欧米、特にアングロサクソン諸国が今大きな曲がり角にさしかかっている。

経済分野における自由で開かれた世界は、第2次世界大戦後の戦争によって破壊され疲弊した欧州と東アジア、日本の復興を進めるためには必要不可欠なものであった。ブレトンウッズ体制に象徴される戦後の経済秩序は、主にアメリカの主導によって行われ、アメリカは自らの財政を出動し自由で開かれた自由貿易体制の維持のために努力する。また、欧州や東アジア、特に日本の経済復興を支えるために、自らの豊かな巨大市場を世界の産業に開放し、その復興と成長を支えたのである。世界銀行が「東アジアの奇跡」と呼ぶ日本と韓国、台湾、ASEAN諸国、そして中国の成長と巨大化は常にその生産を受け入れる巨大で開かれた米国市場に依拠してきたのである。また、伝統的に欧州大陸から一定の距離を置くと思われているイギリスだが、地域統合の一大プロジェクトであるEUの経済統合においては、その原初となる6ヶ国の経済同盟に入っており、実は中核的メンバー国として当初より参加している。

このように、グローバル化とは世界レベルで進行する相互連結性であると同時に、特に20世紀の後半そのプロセスはアメリカを中心とする欧州、日本の3極の先進資本主義諸国家を中心に推し進められたものでもある。戦後、ブレトンウッズ体制で経済・金融分野ではリベラルな政策を推し進めてきた世界は、70年代のニクソンショックを経てアメリカが兌換紙幣としてのドルを世界の基軸通貨として維持することを放棄した頃から、アメリカの国内事情と政策転換によって、さらに金融分野を中心とした新自由主義的市場原理を推し進めていくことになる。すなわち、モノベース（ハード）での西ドイツ、日本などの比較優位から、アメリカはサービスベース（ソフト）のIT、金融などにその政策的な主要分野を転換していくのである。特に、金融分野は情報通信技術の急速な発展とも相まって、米国内市場の規制緩和と同時に国境を越えた取引自体の技術革新も行われ、金融市場はその一体性において最もグローバル化した分野の一つと言えるだろう。ただ、ここでもその始まりはアメリカやイギリスなどの新自由主義的な新しい経済を目指す、グローバル化を希求する国家の政策的決定が大きな鍵を握っており、グローバル化とは20世紀後半においてアングロサクソン諸国を中心とする、先進資本主義国家の決断により加速した側面が大きい。すなわち、グローバル化は日本を含めた相対的に大きな先進諸国家が、温度差こそあれ自ら望んだはずのことであり、天から突然降ってきたものではないのである。

そこで、近年の米英におけるトランプ政権の性急な政策変更やBrexitに見られる、自国優先主義や国際協調枠組みからの離脱は、この戦後の自由主義的世界におけるこれらの国々の役割の大きさを考えるとなんと皮肉な出来事であるとも言える。経済的な生き残りをかけた戦略として、国境を無くすほどのより高い政治経済の流動性、特定の場にとらわれない社会経済文化の不定性を推進した結

果、その高波が自国にも大きく跳ね返ってきて、「高度な自由」という名の何者でもないどこにも所属しない流動性からくる「不安」を増大させる。グローバルな市民というアイデンティティの空虚な実態から、人々は現在急激な勢いでアイデンティティの「帰属先」あるいは「安定感」「安心感」を感じられ、自分が「何者であるか」を定義できる固定先を求めて、様々な対象にすがっているのである。これは、経済格差の急激な拡大やその実態に対する政治の無力感からくる既存秩序への絶望など、ハードな裏付けがある原因を持つと同時に、流動し続け先行きの見えないグローバル化の荒海の中で、少なくとも社会心理的に落ち着きを見いだせる「心の居場所」の社会学であるとも言えるだろう。

20世紀、特に旧植民地諸国が独立して世界地図が主権国家で埋め尽くされていく中で、「北側」を中心に人々のアイデンティティの帰属先は、長らく主権国家でありその所属成員である国民であった。トランプ政権の誕生や Brexit は、アングロサクソン諸国だけでなく多くの他の国家にも共通する「強い近代国家」への心理的回帰を指し示している。「強い指導者」による「強い国家」という物語は、まさに日本も含めて近代化した諸国家で18～20世紀に一度語られた言説であるが、国際政治経済学の視点から見ると現在の国家に、かつてほどの「主権性」があるのかは実質的には疑わしい。前述したように、先進諸国家によって推し進められたグローバル化によって、肥大化したグローバル市場や、そこで巨大化したグローバル企業のありようが、既に国家や国際機関、国際条約や国際的取り決めなどの「公的」な管理を大きく逸脱するものとなっている。国家が推し進めた自由化も気がつくど、巨大で複雑な高度の不透明性を持つ大きな「私的」勢力がうごめく空間を誕生させ、国家及び国家を源泉とする「公的」権力はこれらを管理・監視するというよりは、形が崩れないようにかろうじて外側に目の荒い網をかけているような状態なのである。そして、国や地域によっては、おそらくほとんどの国家でそうであると思われるが、このような国家を取り巻く実態が人口に膾炙しており、さまざまアイデンティティの漂流先が近代国家への回帰の他に、国家以外の原理に向かう状況を生み出している。

ウェストファリア的世界というのは、世界が主権国家によって構成され、世界のダイナミズムはいわゆる国際関係という名の国家間関係としてイメージされるものである。権力の一つの役割は、権力が支配する領域の人々に自領域内及び世界についての「世界観」を提供する「技術」を持つことである。この役割は、古く遡っていくと元々はさまざまな宗教が担ってきたものである。宗教は、まさに世界と宇宙の構造と摂理を提示し、その中にある秩序をある時は神と人間、天と地、善と悪などから成り立つものとして説明し、その秩序の法則に従った人間の道徳的・倫理的振る舞いについてもある程度の方向づけを行ってくれた。何が正しく、何が正しくないのか。人はどこまで自分の思うようにやってよいのか。「市民の行いという行動範囲の限界を指し示す」という意味において、近代の国家や特に法の役割を果たしていたとも言える。

したがって国家が弱体化したり、圧政によって民を苦しめたり、あるいは国家そのものが実質的なガバナンス能力を失った時に、アメリカから中近東に至るまである種の人々は、宗教そのもの、あるいは宗教的な風体をした何かに帰っていかうとするのである。アル・カイダやイスラム国に代表される宗教の名を騙る過激派組織は、中近東アフリカを中心とする広範な西アジア地域の、紛争、混乱や貧困だけに根を張っている訳ではなく、先進諸国家の格差や貧困に喘ぎ、社会不安・不満を蓄積した比較的若年層に浸透していることは注目に値する。全てが「世俗化」したかに見えたグローバル化のプロセスの中で、この現実の不安と暗闇を日々生きる人たちにとって「聖なるもの」の存在や復権

は、圧倒的な絶望の中の希望に見えるのだろうか。

アメリカの政治における宗教や各宗派の役割は、これまでの政権や大統領がアメリカの東西沿岸地域エリートのリベラルな国際的世界しか見せてこなかったために、外からは見えにくかったと言えるだろう。アメリカは現在のキリスト教文化圏の世界において、最も日曜日に教会に行く人の割合が多い「宗教的」な国でもある。トランプ大統領が誕生する前から、いわゆるクリスチャン・ベルトは存在したし、イラク戦争時のブッシュ大統領を支えたのもキリスト教の中の福音派の急進的な勢力であることは、わりと知られた事実である。アメリカにおけるトランプ大統領誕生以降の社会文化的変容を見る時に、何か新しいものが生まれたというよりは、アメリカの外側の世界の人々が知らなかった、見ようとしなかった「もう一つのアメリカ」の原理、すなわち宗教的・人種的・土着的アイデンティティが勢いついていくと考えることが大切だ。ただ、そこに至るプロセスにはグローバル化による不安と流動性の増大、そして現実問題として相当数の疎外され置いてきぼりになった、下降する中間層と没落する古い経済・産業に属する人々の絶望と怒りがある。アメリカ市民の見せているさまざまな動きは、現代のグローバル化した世界における人々の漂流するアイデンティティがどこに向かおうとしているのかの、一つのわかりやすいショーケースであると思う。ある者は強いアメリカ（国家・国民）に、ある者はキリスト教徒（宗教）や白人（人種）として、またある者はそれらが混ざった「地域」「地元」への帰属に、グローバル化の荒波の中でアイデンティティの錨を下ろそうと必死なのかもしれない。

### 3. 宗教の復権？：再聖化・伝統回帰かグローバル化時代の新しい布置へ？

これまでの議論を整理していくと、グローバル化で高まる流動性・不定性からくる現実根拠を持つ社会心理的不安や恐怖が、アイデンティティの漂流から新たな帰属先の漂着点を見つけようとしている一連の現象は、必ずしも「伝統回帰」や「再保守化」だけでは語れない側面があるということだ。つまり、全体が資本主義のシステムとして統合されつつある「世界」、これはグローバル化の核心の一つだと言えるが、そのようなヒトもモノも万物が商品化し消費対象としての性質を免れ得ない段階に世界は入ってきている。ただ、そのような中でも人間として残る「何か」は「私」とは「何者」なのか。あるいは「どこから来てどこに向かうのか」という人間存在の本質に関わるものであることは興味深い。技術革新とグローバル化がいくら深化しても、人間はやはり人間であるということなのか。その「何か」の説明をグローバル化時代の人々は、権力や権威を頼りそこを通じて精神的安定や帰属感を希求している。人間社会の根本的な思考形態を、新しいのか変わらないのかはわからないが、これらの現象や背景の分析は明らかにするはずだ。それは、暗闇を照らす灯明か、混沌を秩序立てる「ガバナンス」や「神」や「世界」か、あるいはそれらを代替しようとする新しい「何か」なのか、大変興味深い問いである。

ここでは、人類の古くからまさにそのような思想的営為、つまり人々に人間と世界について説明装置を提供してきた宗教について考えることによって、その契機を探るものである。

近代国家や法、あるいは諸学問が誕生するはるか以前から、宗教はそれらをまとめたような全てであった。ある場所や人々の文化なり伝統なり価値観なりを語る時に、その土地に根付いた、あるいは流入したり廃れたりした宗教について考察しないのは、実際、その場所の文化、伝統、哲学、思想に触れていないのとはほぼ同義であると言える。神からの解放を願った近代哲学や思想も、結局のところ逃れなければならないほど巨大なものとしての、宗教、神をきちんと認識しているのである。逆に、

ある場所や人々の宗教あるいは思考形態や風習に残るその「遺構」をきちんと認識することは、地域なり文化なり価値観なりを正確に捉える大きな契機を私たちに提供してくれる。どの場所においても、音楽、建築、絵画、文学、詩歌などは、宗教的宇宙観の再現や解釈の具体的表現形態であり、特にそのことはキリスト教文化圏である欧州と、イスラム教文化圏である中近東という二つの一神教の文化圏において顕著であるように思われる。それは、神と神の摂理が宇宙を支配するという、一神教の持つある種の美しい全体性からくるものかもしれない。

古代から近世にかけての東アジア諸国家においては、世界宗教である仏教が人々の救済だけでなく、国家を護る（統治する）原理・原則として、まさに法として長い間使われてきた。しかし、そこにあるのは現代の人々が抱く、何かよくわからないもの、あるいは閉鎖された向こう側にあるものとしての宗教ではない。国内的にはそのように見られていても、宗教というチャンネルは基本的に外の大きな世界へのアンテナであり、外部からは世界の文化や文明への開放性の証ということもできると思う。そのことは日本においても顕著であり、ユーラシア大陸の東端に浮かぶ列島は、長い間主に仏教の受容によって政治、社会、文化を大きく形作り、自らを変容させてきた歴史を持つ。古代から近世に至るまで、日本における仏教寺院は世界の新しい認識論や世界観に触れる、最先端の研究機関、今の大学のような社会的機能も持ち、国内の文脈からは特権的場所の持つ閉鎖性と捉えることも可能だが、その置かれた世界的位置はまさにローカルな国内の文脈を世界に直結する、開放性と交流性そのものである<sup>2)</sup>。

鑑真和上が開祖とされる、唐招提寺という寺院の名前が、そのような日本あるいは世界における寺院とその空間の世界への開放性を物語る。すなわち、唐招提寺という名前は、サンスクリット語の「チャトルデイシャ」の漢字音を当てたものであり、これは漢字での意識の「四方僧房」に当たる。この「四方」の「4」とは全方位、すなわち世界を表すものであり、僧侶が各地から教えを学びにくるという意味もあるが、もともとの「チャトル＝4」は全方位、世界を表す語でもある（西洋では、チャトランガというインド発祥とも言われるゲームが伝わってチェスになった、との説もある）。このように、仏教の空間の持つ聖なる特別性というものは、国家権力と結びつくと比叡山や高野山のようにある種の「権威」として権力性・閉鎖性を持つモーメントもあるが、世界との繋がりにおいて、今日風に言うところグローバルな文脈においては、先進性の受け入れ地帯であり、開放性と外界との接続性のトポスであり、その意味において多様性を包摂する特殊な空間として、政治との関係性だけでなく、社会文化におけるある種の世界的公共性ととも存在するものとも考えることができる。

このことは、異なる宗教間の交流についても言うことができる。例えば、海外に対していち早く開かれた港の一つとして函館の地が挙げられるが、ここでも寺社仏閣の空間のある種の開放性とグローバルな公共性を示す事例が歴史的に確認される。函館が開港すると、多くの外国人、特に欧米やロシアのキリスト教徒たちがこの地に赴いて、商売を開始する。キリスト教徒たちにとって人々の移動はすなわちキリスト教の拡散と定着を意味するため、後にこの地に現在は多くの観光客を呼び寄せる名所となった諸宗派の教会ができるまで、キリスト教徒たちの集会の場を確保することは困難を極めた。当初、入ってくる人数が少なかった頃は、各国の商館が臨時にその役割を果たしたが、そのうち商館も手狭となり宗教上の集会を行うことが難しくなる。その時に、広い敷地を持ち元々地元地域社会の公共の場として機能してきた、近隣地区にある寺院や神社がその境内をこれらの異教徒に貸し出して、集会を可能とする時期があった。このように、日本各地、あるいは世界各地にある宗教施設の空間と

しての実態と歴史を辿り分析していくと、普段、私たちが無意識に持っている敷居の高い宗教的空間とは違う、しなやかな開放性、グローバルな公共性という観点が浮上してくるのである。

#### 4. 「場」の復権：グローバル化の2つの物語が「還る場所」

前述した、宗教空間あるいは「場」の性質は、実はグローバル化自体においてグローバルな文脈とローカルな文脈の両方で、あるいはそれらを繋ぐ結節点としてユニークな機能を果たしているように観察される。グローバル化とは、ヒトにとっては大移動時代とも呼ぶべき新しい段階を生み出し、人間はホモ・サピエンスからホモ・モビリティスへと変化を遂げているようにも見える。増大する観光客は全人類のかなりの割合が旅をする時代の到来を告げており、宗教空間や「場」はもれなくその重要な目的地の一つとなっている。そもそも、キリスト教、イスラム教、仏教などの世界宗教は以前からグローバルな存在であり(Beck 2008=2011)、その聖地を訪れる必ずしも信徒ではない人々の波は、新旧のグローバルなアクターの交錯する地点とも言える。

グローバル化は、ヒト、モノ、カネの自由な往来であり、ベック(Beck 1986=1998)がいうところの近代の「伝統の呪縛からの解放」がさらにハイパー化した状態である。この「自由」には、おそらく階級差によって抽象的・表面的には形式的に同じに語られる、全く異なる2つの「伝統からの解放後」の物語がある。

近代化、産業化、グローバル化によって人間は、伝統、宗教、中間団体、地域、国家、土地という違いこそあれ、それらから解放され自由になった。グローバル化の2つの物語は、この「自由」を巡る全く異なる2つの位相を語る。近代化とグローバル化はある時期まで、多くの人に良い意味での流動性をもたらした。

この流動性は交通手段の発達による、①移動の自由からくる、特定の土地に必ずしも縛られない、「場の自由」「移動の自由」の流動性であり、形式的には一生1つの土地(とそのコミュニティ)に束縛されない自由を指す。②土地に基づく封建制、政治文化的階級制の区分線がなくなった事により、社会経済的流動性、「社会上昇」「社会移動」などの「生まれ」に基づく「運命からの自由」。③通信、情報手段、メディアの発達による「世界観」の「宗教的」「土着的」「世界観」からの自由。これら3つの自由は、「流動性」「不定性」「自由」とともに「浮遊性」「漂流性」「根無し草的不安」なども発生させる。

流動性は富裕層にとっては「完全なる自由」を意味する。住む場所、滞在場所、移動、消費など思いのままの「如意」の彼らにとって、世界中のどの地点も「同じ場所」である。永遠の自由な旅人となった彼らにとって、漂流はステータスであり、自由の行使と体現である。特権階級にありがちな「文化」「伝統」「歴史」への目覚めと「使命感」もまた、資本主義的な消費文化と無縁ではなく、それでも彼らは「聖地」としての宗教空間を目指す。インスタ映えなのか、悟りを求めるポーズなのかは多様だが。

上昇しない中産階級と貧困層にとって、宗教的空間は「救い」を「求める」場である。貧困、職の不安定、「自由」「流動性」の対価はこの人達にとっては、不安と不定性の恐怖の先にある「安心」「アイデンティティ」の希求である。社会経済的な「居場所である」会社や職を追われる、あるいは居場所から追放される恐怖に追われ、時としてどこに「所属する」「帰属する」のかわからず、人々は日常の社会経済以外の場に「定点」「定性」を求める。今日の不安から逃れ明日の希望を見出したいのだ。

日本社会においてそれは若者や女性に現れ、都会のモスクや世界遺産の山奥の高野山の宿坊などに現れる。

この相容れないかに見える、グローバル化の2つの物語は、それでも「場」「空間」「居場所」を求める果てしない旅として、宗教的空間へと誘われる。不定性の中の定性。変化の中の不動。流動性の中の不動性。帰属先のないアイデンティティの帰属先として、現代の「約束の地」は消費資本主義の極致としての旅行先として、さまよえる「居場所」を求める民衆の心の安らぎの地として「パワースポット」「聖地」「インスタ映え」「巡礼」の「目的地」として、従来の檀信徒以外の沢山の「旅人」「流浪の民」「ノマド」を受け入れる。「ノマド」とはプロセスであり、必ずしも「ノマド」を本当に希求しているというわけでもない。

現代のノマドは、豊かな遊牧民とは違う。草原の遊牧民はその生活圏域が広大なだけで、大きなリビングの中を家畜や家と移動しながら生活しているのだ。現代のノマドは「大いなる家」を持たない。「国家」なのか「国民」なのか「宗教」なのか「故郷」なのか「コミュニティ」なのか、居場所なき個人化した彼らは、世界からの防波堤としての国民国家、企業、地域、神を持たない、グローバル化の波を直接被弾した人々なのである（一部波に乗っている、サーファーのような富裕層もいる）。帰るべき場所を積極的に失ったはずの彼らは、また「帰るべき場所」「居場所」を「アイデンティティ」とともに求め、さまよっている。

宗教の空間を巡って起きている現象は、つまるところグローバル化の一過的帰結である、他の国家、企業、地域、ナショナリズム、原理主義などの現象と呼応している。トランプ、Brexit、イスラム国とそれらの支持者も、新たな居場所、アイデンティティのを求める叫びの異なる表現形態とも取れるものだ。しかし、グローバル化の現状は国民国家、EU、宗教が誕生した頃と全く異なる環境と文脈を提示している。企業が資本主義の世界で対応が早いのは当たり前だが、高野山のような聖地が海外からのグローバルな旅人を受け入れ<sup>3)</sup>、パドバの教会のような聖域がスリランカのカトリック教徒だけでなく彼らに付随するスリランカの土着の文化や宗教も受け入れていること、グローバルな空間からの来訪者に、あらたなる「世界」宗教として変質しながらも、空間を解放していることは、宗教の生命力とともにグローバル化における新しい文化のあり方の方向性の1つを、灯明のように照らしているようにも見える。

## 5. おわりに代えて

完結した一つのグローバルな「世界」をさまようアイデンティティや帰属先の「居場所」を求める人々。それらは、不定性の中の定性、流動性の中の不動性といったグローバル化の逆説的アイロニーであり、このアイロニーはある人々の間では旅という形態を取る。しかし、この終わることのない現代の巡礼はこれからもその形を変えながらも続くものと思われる。この現代のグローバルな巡礼は、一生に一度メッカやローマ、アビニョンや伊勢に行くことを示すのではなく、自分の「聖地」（寺社仏閣なのか、国家なのか、地域なのかは人によって異なるが）を求めて、それが定まるまで永遠に続くのだ。もしかしたら、ある人々にとってそれが定まることはないのかもしれない。高野山や東京のモスク、都市民にとっての農村や里山、絶景スポットやSNSに「映える」場所は、個性の多様化とともにどこにでも存在する。このように、特定の空間が新しい機能や特性とともに、かつての「聖地」「聖域」としての「特別な空間」の地位を異なるグローバルな文脈で復権しつつあるのは興味深いことで

ある。これは、近代の主権国家が20世紀の終わりとともにその絶対的帰属性と領域管轄性に終わりを迎えた後に、その役割の断片がまたブーメランのように宗教に戻ってきているとも言える。しかし、宗教の聖地のグローバル空間への、言い換えると、「伝統的」なもののグローバル空間への再埋め込みは、宗教とは本来異なる資本主義・商業主義などと相まって、文化や社会の伝統との新たな接続を示す、グローバル化時代の「心」の行方を占う事例として注目すべきものであると考える。

## 注

- 1) 本研究は、筆者も研究分担者を務める科研費研究プロジェクト「宗教言説にみるグローバル化の影響および宗教間の平和的対話構築の可能性」(基盤研究(B)、16KT0083、研究代表者: Peter Richardson)の支援を受けているものの一部である。
- 2) 宗教、特にカトリック教会が古来よりグローバルなアクターであったとの議論はBeck(2008=2011)を参照のこと。
- 3) 長島美織、渡部淳、和田雅子、Richardson, Peter, “The Opening up of Koyasan in the Age of Globalization: A Study of Temple Lodgings,” 第19回国際社会学会世界研究大会(於トロント)における研究発表。2018年7月17日。

## 文献

- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局.)
- Beck, Ulrich, 2008, *Der Eigene Gott: Von der Friedensfähigkeit und dem Gewaltpotential der Religionen*, Frankfurt am Main: Verlag der Weltreligionen. (=2011, 鈴木直訳『〈私〉だけの神——平和と暴力のはざまにある宗教』岩波書店.)



## **Placing “Space” in Politics and Religion in the Globalization —Re-defining Immobility of Specific Spaces in the Global Liquidity—**

WATANABE Makoto

**Abstract:** This paper aims to consider the status quo of the transformation of globalization from the viewpoint of the immobility of “place” and “space” resurging in the mobility and liquidity of this floating world. Unlike the original expectation, the world is now experiencing various phenomena, which represents quasi-counter globalization or global backlash. This paper focuses on two facets of globalization: one from the political backlash and another from the religion in order to discover what people want and where they would like to direct themselves in this uncertain world. Certain contemporary sacred places attract many people. This means that people need to be docked to a certain fixed place in order to secure their identities. The sense of security of placing oneself in a special space that is usually independent of everyday normal life space indicates the sense of insecurity and fear in the rapid process of globalization.

**Keywords:** globalization, state, society, religion, place, space